八十八膳献穀会　会報

結　yui第 17号

祭りの記憶　おやけ　こういち

小さい頃、お祭りと神社をセットにして考えていた。お祭りは必ず神社で行うものだというように…。

わが家の近所には、街道沿いにこじんまりした森があって、そのなかに、これまた小さな社(やしろ)があった。四月の祭礼の日には隣組の子どもたちが神輿をかつぎ、「エィヤ、サーッサ」と掛け声をかけながら、賽銭箱を抱えて隣組の一軒一軒を廻った。わたしにも多くの記憶がある。

わが家から七、八百メートルくらい離れた所にある神社は、参道や境内の周囲にケヤキやスギの大木が並ぶ森が配置され、近くの社とは比較にならないくらい大きな存在だった。毎年八月一日の祭礼には多くの人出でにぎわう。踊りがあり、馬が参道を駆け、宵祭りから本祭りまで様々な行事が組まれている。

幼い頃、人見知りだった私はいつも人ごみに萎縮していた。機嫌の悪い子として、父母にあやされながら早々に家に戻った記憶がある。

あれから半世紀が過ぎた。近年、遊びや行事の多様化で子どもたちは忙しいらしい。今から四年前のこと、隣組の総会に出席したとき、子ども会の母親から意見が出た。四月の最初の土日は春休みでスポーツや行事が多く、その妨げになるので、子ども神輿が町内を練り歩く行事を止めてほしい旨の申し出だった。すぐさま長老からは惜しむ声が上がった。

しかし主体はいつの頃からか、隣組から子ども会に移っていて、詠嘆こそすれ、止める術がなかった。一年の検討期間を置いたが、結局中止となった。その六、七年前には隣町の神社の子ども神輿も中止になっている。妻の実家があって、息子や娘が小遣い稼ぎに神輿を担いだことも思い出となった。小さいながら長い歴史を持っていた、いくつもの祭礼がポツンポツンと消えて遠ざかっていった。

これに比べ大きな神社の祭礼は、祭礼日を移行させることなく続いている。多くの祭りの日程が神輿の担ぎ手の都合や観光客を当て込みイベント化して土、あるいは日曜日に移行するなかで、見ようによっては頑なに、伝統を受け継いでいる。しかし、裏方に廻る人の「大人はサラリーマン、子どもは学校、なかなか人集めに苦労しますよ」の語尾から漏れる苦笑がここのところ毎年続く。

相変わらず人ごみは苦手なため、祭礼日が土曜日、日曜日に当たっても神社にでかけることは滅多にない。むしろ祭礼が平日に当たった夜、時間が許せばこの神社を訪れることにしている。参道の入り口に立つと、奥に灯りが見え、幻想的でもある。ゆっくり歩き、灯りに近づく。「健康」「家内安全」などと書かれた灯篭の灯りが、人気のない参道の両側に残っている。その素朴な祈りは、祭礼をより身近に感じさせてくれる。

（おやけ　こういち・いわき地域学會会員）

年間行事

4月	総　会	10月	芋煮会
5月	田打祭	11月	飯野八幡宮新嘗祭
5月	御田植祭（会報発行）	1月	農立神事
8月	注連縄奉製勉強会	2月	飯野八幡宮祈年祭
9月 15日	飯野八幡宮八十八膳献饌		
10月	抜穂祭（会報発行）		研修旅行

八十八膳献穀会　会員募集

現在　奉耕会員　二十九名
　　賛助会員　五十七名
　　特別会員　五　名

飯野八幡宮の古式大祭で行われる八十八膳献饌神事は、古くから連綿と受け継がれてきたもので、県の重要無形民俗文化財に指定されております。

八十八膳献饌神事を永く守り伝えてゆくために、八十八膳献穀会を発足し、神饌田を設けて、田には餅米を作り、畑では野菜等を栽培し、御神饌として奉納しております。

このご奉納を通じて、日本の伝統的な農耕儀礼の復元と風土に根ざした農耕文化を、新しい世代が理解して、更に受け継いでゆくことを願っております。なにとぞ、私どもの活動をご理解いただき、多くの皆様がご入会くださいますようお願い申し上げます。

原稿募集のお願い

会報「結」は皆様のご寄稿により形成しています。
発行1回を迎え、今後も「結の輪」を広めるべく、
ぜひ奮ってご参加ください。
内容・形式などは下記宛てにご連絡ください。

結　yui　No.17

発行日　平成 20年 5月 24日
発行所　八十八膳献穀会
〒 970-8026
福島県いわき市平字八幡小路 84
飯野八幡宮　社務所内
TEL　0246-21-2444
飯野八幡宮web
（「結」既刊分はこちらへ）
http://www.noteplan.net/8mn/
発行責任者　飯野　光世

いのち輝くまつりの誕生　門馬　巌

人類の大昔、「まつり」はどのように発生し、人間に受け入れられていったのであろうか。

遠く旧石器時代「まつり」が生まれる前は、文字の記録が残っていないため実際の様子は分かりにくい。しかし、古代の「まつり」は、季節や天候の変化などで食料確保が常に不安定な状態におかれている、そんな状況で誕生したと推測できる。

食料の保存方法もなかった時代、必要な食料が手に入らない状況が何日も続けば、すぐに飢え死にしてしまう。人類がもっとも恐れたのは、病気そして飢えであろう。どうすればいのちが危ぶまれる不安から逃れられるか。全く見当が付かなかったとき、人々は一本の柱を回りながら、豊かな食料の確保と子孫の繁栄を自然に叫び太陽に祈る美しい「いのちの輝き」を持っていた。

「まつり」は日常的ではなく特別な意味をもっていた、ぎりぎりの生存条件に置かれた人間にとっては特に重要だったであろう。大事小事なく穏やかな日々を暮らせるよう、祭りは未来に働きかけることのできる唯一の手段であったのだ。

初めはごく簡単な言葉、感動をそのまま表現するだけのまつりばやしが、農耕などの労働時に自然発生した感動の表現が掛け声となり、掛け声が連結して「ことば」文字に発展し歌が生まれた。

歌は、集団生活をおくる老若男女や、暮らす季節を問わず人々の叙情詩となった。それは「まつり」のいのち輝く詞詩や文学の初めの姿でもあった。こうして「まつり」は人類の発生とほぼ時を同じくして起こり、連綿と受け継がれてきた人々の日々の姿をあらわしていった。

そもそも古代の人類は、動物や樹木・山や沼・太陽など、あらゆる動植物や自然物・自然現象に、人間と同じように「魂」が存在すると信じてきた。集う人々に祭主が、魂の意味や先祖の意志と自然と人々との営みを伝えた。「まつり」も時代と共に発展し、長い時間をかけて神秘的で美しい神事に整えてられていった。洗練されたこのまつりこそ、人々のいのちの輝きなのである。

いのちの輝きは常に「明き・清き・直き心」でありつづけなければならない。幸いに、わが日本列島は豊葦原水穂国である遠い昔から、春夏秋冬「まつり」の年中行事によって自然の恵みに感謝し五穀豊穣に心を捧げてきた。飯野八幡宮八十八膳献穀会の意義は大きい。益々のご発展を祈念するものである。

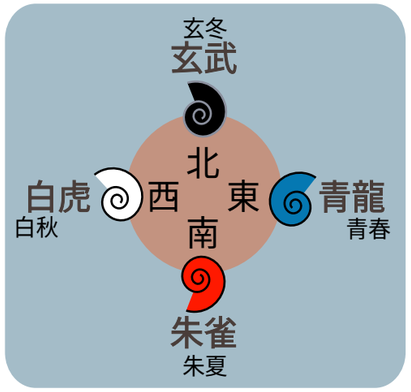
（もんま　いわお・八十八膳献穀会　賛助会員）

風薫る　飯野　光世

風薫る、とは五月の時候の挨拶によく用いる言葉である。この時期に薫る匂いにはどのような印象があるだろうか。桜はあまり香りがないし、梅はよく香るが季節が異なる。この場合の薫るは、若葉や厳しかった冬がようやく過ぎ、待ちわびた目映い新鮮な季節の雰囲気を表したものだろうか。そして、田植えがおわった田面を吹く風の匂いに、生命の息吹を感じたのではないかと私は思う。

夏の匂いはどんな匂いか。草いきれの匂い、夕立で焼けたアスファルトから立ちこめる匂いなど人それぞれに違う印象があるだろう。秋の匂いは、私にとっては、流鏑馬の馬の匂い、装束の準備の樟脳の匂い、注連縄の藁や生姜の匂い、お祭の夜店のソースが焼けた匂いなどが強烈なイメージになっている。冬はどうか。からっ風に乗ってくる埃っぽい匂い、正月の準備にあたり、神札を奉製するときの墨や朱肉の匂いを、冬の匂いと私は連想する。

匂いと季節について私的な印象を書いてみた。匂いは人の記憶に根強く残るものだという。五感の中でも原始的な感覚だともいう。同じく五感のうちの１つである視覚的な記憶、色と季節との関わりはどうだろう。



先人は、天の四方を司る神獣（青龍・朱雀・白虎・玄武）を配し、青龍は春、東、青を表し朱雀は夏、南、朱を表し、白虎は秋、西、白を表し、玄武は冬、北、黒を表していることは、人口に膾炙していて、歴史的にも文化的にも奥が深そうである。

また、色目については私ども神職が着用する装束も、色によって身分や階位を表している。これは聖徳太子が定めた冠位十二階が明治の王政復古により国家機関の最上位に神祇官がおかれ、神職の服制が定められ、戦後は神社本庁がその制度を引き継ぎ今に至っている。

大祭に着用する正装には神職身分特級は黒袍に白八藤紋白奴袴、一級は黒袍に白八藤紋紫奴袴、二級上は赤袍に薄紫八藤紋紫奴袴、二級は、赤袍に無紋紫奴袴を、三級・四級は紺袍と無紋浅黄奴袴と定められている。その他に礼装という装束が新たに定められ、白袍に白袴で本日斎主が着用している装束で、祭員が着用している装束は、斎服という装束である。

我々神職は、他所の祭礼に参列する際、一目で奉仕する神職の身分がわかるようになっている。また、特別の祭礼には神社本庁のお許しを得て、身分以外の装束を着けることができる。

田植えが終わり、田一面のたよりなげな早苗が薫風にたなびく。これより先、苗が育っていくなかで、風と水の憂いや虫の災いが無く、豊かな秋の稔りを祈るものである。

（いいの　みつよ・　飯野八幡宮　宮司）